歌語の自由

特259
990

始

特259
990

歌謡の自由

緒言

一歌は、時代に適應して、個性を發揮すべきは自然の理なり。歌想を廣くして、歌語の自由なるべき事も、自然の趨勢なるべし。於之、平語を采り用ゐて、歌語となすの必要を生ず。勿論、諷誦を害せざる範圍に於てすべきは、歌が日用文にも、文章にも非ざる、純然たる韻文たる事を忘るべからざればなり。

一平語中、既に、ガザダバラ各行の頭音に在るものは、古くより蕃音として、歌に用ゐざりしと雖、これまた撰擇して用ゐらるゝものは、用ゐべきこと云ふまでもなし。又、去聲、入聲の二音も、鼻音、促音なるが故に、諷唱を害するを以て、古より排斥すと雖、こも亦、斟酌して采り用ゐざるべからず。

一雅言、即ち、文語と、俗言即ち平語との相違は、平語に於ては、文語の續体言を、續用言に轉じ用ゐるにあり。例之、倒るゝ、行るゝ、食るゝを、平語にては、倒れる、行れる、食れると云ふが如し。大分縣の人は、正しく食るゝと云へり。今、歌

語として用ゐむには、正しく續体言に云はざるべからず。

一 曾て、歌語研究を興し、徐々に平語を用ゐ來り、已にその幾分の弘く使用せらるゝを見て・敢然、鼻見を發表することゝなせるも、倘反對者のあらむは、豫期する所なり。

一 書中、大隈言道の歌を例証として掲げたるも、言道に心醉するものに非ず。渠が、力説せし天保の民主義を、直に編者も昭和の民と高唱して、今倘、存在する束帶歌、木偶歌、講釋歌を改良して、歌界の進展を企て、限定せられたる歌語をして、不自然の域を脱せしめ、眞個自由の天地たらしめむと、欲するに外ならざるなり。

一 語彙として、いろは別に列擧したるものは、其數に於て、倘一小部分に過ぎず。凡そ之に準じて、更に、撰擇して、多數ならしめむことを望むものなり。

昭和四年春四月

浪華隻眼歌客稲園叟志

目次

一、歌とは如何……一
二、歌の變遷……二
三、歌は韻文……二
四、歌の模範……三
五、言道の歌論……四

六、歌は心を種……五
七、新歌語の名詞、代名詞、附語彙……一八
八、新歌語の動詞、附語彙……三五
九、新歌語の形容詞、副詞、附語彙……五四
一〇、新歌語の感歎詞……六九
一一、否定詞（打消）……七二
一二、其他補遺……七五

歌語の自由

小野利教述

一、歌とは如何

なるものかとの、奇問を發する現代人が多い。歌とは、日本人の心に感じた事、即ち見聞した事を、卅一音の詩形に表はすものだ、と答へる外はない。何故に、日本人が詠むべきものかと問はゞ、遠く神代に創り、所謂神ながらの道であつて、二千六百年來、國民性となつて、忠君愛國の思想と化してをるからだ、と答へる外はない。然らば、歌を詠まぬものは、日本人でなくて、忠君愛國の思想の無いものかと問はゞ、然りと答ふる外はない。

二、歌の變遷

を知らねばならぬ。即ち、萬葉集時代、古今集時代、新古今集時代と變遷してをる。何故に、斯く變遷したかと云ふと、國語が變遷するからである。然らば、歌は、國語の變遷に伴ふものと云つて宜い。然るに、何故に現代の國語でない、死語を用ゐるかと訝かるものがあらう。死語を用ゐることは、既に、時代錯誤であるが、强ひて之を爲すは、何故かと云ふに、雅馴なる語を得ぬからである。穩健雅馴なる、その時代々々の國語を使用し得ないからである。

三、歌は韻文

であつて、音律に合して歌ふものであるから、聲調が必要肝腎である。雅馴でない國語は、聲調を害するものである。故に、死語、即ち古言を用ゐるのであつて、頓て、

歌を詠むといふ事が、困難になつたのであるから、此の弊を矯め直さば、歌は、容易に誰でも詠む事が出來る。於此、歌語の自由といふ事が起きて來る。

四、歌の模範

とすべきものは、如何と云ふ問題が起る。乃ち、以上の原則に合ふ所の歌であるが、それは近き明治に求めると、　明治天皇の御製である。畏くも天皇は、

　思ふことうちつけにいふ幼兒の言葉はやかて歌にそありける

と仰せられて、御製の悉くが、活きた國語であるから、直に、模範とすべきものである現代の新人が、良寛や元義を、頻に推すやうだが、これ等は、萬葉にかぶれて居て、然も、語法句法を度外視、無視してをるから宜くない。其の點に於て、完備して居て然も清新なる歌を詠むだものは、曙覧と、言道とである。

五、言道の歌論

は、一に、魂なくして、姿も意も昔のまゝなる歌は木偶歌であつて、千萬首詠むとも籠にて水を汲むと同じである。二に、公卿の束帶歌といふものがある。三に、我は天保の民なり、古の眞似をなさば、後世を僞り欺くことゝなる。四に、歌は花鳥風月の娯樂にあらず、即ち、心にもなき事をいふは、玩物である。今は、詠歌を玩物にせんとて詠むが、古は、歌を集めて、後に、之を玩物とした。斯る、月花の講釋歌は、詠まぬがましである、と云つて居るのは、眞に、立派な見識である。要するに、歌の古典的素質を忌み、用語は時代に適應すべく、又、消閑の遊戲たらしめずとの抱負を擁いて居たのは、大卓見である。乃ち曰く、漢語、梵語も、今は國語同樣ゆゑ、嫌ひなく用うべきものなれど、よく選定せねばならぬので、今人の平語の如く、歌語を自由に使ひ得ぬ爲、自己の思ふがまゝの事を云出づること能はぬは、悲むべき事である。然

も、その用語の選擇は、歌を學ばねば能はぬといふことが、抑々前後撞着だと云つてをる。

六、歌は心を種

にて、詠むものであつて、口眞似歌のいかぬは勿論、題に囚はれずに、月花を詠むにあらずして、月花につけて、自己の感想を云ふものであるから、何所までも、心を種とすることを忘れてはならぬ。唯々己の心を種として、詠むべきものである。その歌の善惡は、詠者の知る所でなくて、選者の與り知る所にて、自分自身の事は知り難きものであると云つてをる。右の意見によりて、予は、言道の歌に對する堂々たる懷抱を賛し、大に、用語の自由と其の選擇とを唱導すべく、この小著を、公にしたのである。

舌たゆく物言ひ習ふた童や云ひもかなへぬ今の歌人

あゝ、吾曹、正に愧死すべきではないか。

七、新歌語の名詞、代名詞　（小部分を揚ぐ以下之に準す）

○つかれねむり

世の中をあぢきなみたる年の暮つかれ眠のうづみ火のもと　言道

用言、二つより成れる名詞で、つかれ休め、つかれ馬、つかれ牛、などある。

○ひとりゑみ

咲出づる庭のさくらの獨笑さは何事かをかしかるらん　同

既に、ひとり言といへば、獨歩き、獨旅、獨住、獨遊、獨讀、獨角力、獨よがり、獨見、獨踊、獨ほめ、獨狂ひ、獨娘、獨息子、獨習、などある。

○子つれ

其方（ソナタ）にて住むべき國もまだ知らぬ子つれの燕今日歸るなり　同

板負の牛、荷積車、子負女、子持魚（香魚、沙魚、何魚でも）、など。

○はしたもの

世の中のはしたものなる我身こそ花にま近き簀には居れ　同

既に、はした女と云ひて、はした男と、何故いはぬのか。

○ものごり　はなめて

何事も打捨て易くあぢきなき我物ごりに懲（コ）りぬ花愛で

物凝（モノゴリ）は、物事に熱中することで、植木ごり、謠ごり、釣ごり、芝居ごり、庭球ごり、歌ごり、など、又、物めで、菊めで、などは宜い。

○さしむかひ

事もなきさしむかひなる花なれど誰にもまさる友どちぞかし　同

○まくらかみ

いづこにて折しか醉ひて覺えねど枕がみなるはなの一えだ　同

これは、枕頭にて、枕髪ではない。枕もと丶云うてもよい。枕の山など云ふは、陸である。

○みちづめ

夕まぐれ尋ねつくせる道づめに一木はさきてある花もがな　言道

既に、橋詰といへば、道詰は無論よいが、山づめ、川づめ、谷づめは如何であらう。

○えだぐち

折とりしあとの枝口朽入て心よわげに咲くさくらかな　同

切口、堀口、取口、などある。飲口、話口などは、別の意味である。

○ふりざま

夕暮の雨のふりざま變り來て嵐にくる丶山ざくらかな　同

逭げざま、歩きざま、食ひざま、仕ざま、晴ざま、立ざま、怒りざま、云ひざま、など。

○はなざま

ぬれぬれし雨晴れぬれば櫻花萎つくろふはなざまぞする　同

葉ざま、木ざま、枯れざま、やつれざま、死ざま、勝ざま、負ざま、疲れざま、痩ざま、など前の類である。

○てあたり　ひえてきて

端居する板の手あたり冷て來て秋とはしるくなれる夕陰　同

○かげばうし

かくれ居て我あと去らぬ影法師居ならびてだに月を見よかし　同

○あふぎみがほ

今迄に在しこずゑを玉椿あふぎ見顔に散れる一花　同

○はてのせまり

いの川の蛙の聲の諸聲のはてのせまりに堪へずもある哉　同

○いひふれ　言道

花咲けば人にかはらず宿毎に云觸れて鳴く百千鳥かな

○ほねをり　同

世の中は伸び縮む間の骨折にやがて我身ぞ古扇なる

○ほどみせ　同

花もまた斯く咲かんとの程見せに積るかえだの初春の雪

○うりぐひ　同

おのれから其所（ソコ）に生れて畑も田もうり食ひ虫は我身なりけり

買食ひ、賣損ひ、買損ひ、耻搔虫、鳴虫、安物買、値切家、などあらう。

○まちとほ　同

二日三日降れば降る迚歎きけり雨待遠に云ふかと思へば

待遠し、待遠く、待遠しく、待遠しき、待遠しけれ、と志志幾活にいふは勿論である。

○をしみのこし　同

何方の空まで行て子規をしみ殘しの聲は鳴くらん

佐行四段にいふは、勿論である。

○おきうさ　同

いざと思ふあしたの床の起きうさに枕はなれて手まくらぞする

寢うさ、離れうさ、入り憂さ、などあらう。

○むかしむかし　同

何事もむかし昔に成果てゝまだ殘りたる我ぞかなしき

これは、副詞として、今今、誰誰、それぞれ、元元、又又、先づ先づ、末末、然然、端端、果果、後後、唯唯、そこそこ、などある。暗暗、見る見る、扨扨、區區（マチマチ）、待て待て、も同じであらう。

附語彙

い

いきづかひ(呼吸遣)　いまがた(今し方)　いははな(岩鼻又岩端)　いひぐせ(云癖)　いひふれ(云觸)　いひごと(小言)　いひがかり(云懸)　いかものくひ(異食者)　いそあさり(磯漁)　いきさつ(形勢)　いけん(諫言)　いさかひ(爭論)　いぢ(意地)　いき(意氣)　いなこき(稲扱器)　いしころ(石塊)　いぬじに(犬死)　いちづ(一途)　いきすぎもの(生意氣物)　いさくさ(紛紜)　いさこさ(仝)　いぢづく(意地附)　いす(椅子)　いうれふ(遊獵)　いくぢなし(薄志)　いうびん(郵便)

ろ

ろよう(旅費、路要金)　ろれつ(呂律)　ろいろ(蠟色)　ろうそく(蠟燭)　ろうばい(臘梅)　ろくでなし(無頼漢)　ろくさま(碌樣)　ろうは(綠鬢)　ろくろ(轆轤)　ろうまじ(羅馬字)　ろ(絽)　ろべり(爐邊)

は

はす(斜)　はすかひ(斜方)　はずみ(動機)　はなさまかたち(花樣形)　はだし(裸足)　はぎり(齒切)　はらだち(立腹)　はなぐすり(鼻藥)　はらいせ(腹癒)　はしか(痲疹)　はしご(梯子)　はとむね(鳩胸)　はぢざらし(耻洒)　はなめで(花愛)　はすはもの(蓮葉物)　はちあはせ(鉢合)　はしつかた(端つ方)　はしたがね(端金)　はしたもの(端下物)　はもの(端物)　はしたを(端下男)　ばあい(場合)　ばあたり(場當)　はめ(破目、成行)　はつほ(初穂)　はで(華美)　はざかひ(端境)　はてのせまり(最高調)　はつしや(發車)　はいかい(俳諧)　ばくはつ(爆發)　はうらく(焙烙)　はえぎは(髮際)

に

にがて(苦手)　にがみ(苦味)　にがむし(苦虫)　にくまれぐち(惡口)　にくげ(惡氣)　にげごし(遁腰)　にげしたく(遁仕度)　にがほ(似顏)　にせもの(贋物)　にづくり(荷造)　にごしらへ(荷拵)　にくつき(肉附)　にこり(莞爾又嫣然)　にんき(人氣)　にき(日記)　にもの(煮物)　にんじん(人參)　にふよく(入浴)

ほ

ほかせ（帆風） ほおろし（帆卸） ほこり（埃） ほむき（穗向） ほとぼり（餘燼） ほどみせ（程見せ） ほど（愛想） ほねをり（骨折、盡力） ほねぐみ（骨組） ほんまう（本望） ほんい（本意） ほどこし（絕與） ぼん（盆） ぼんさい（盆栽） ぼんけい（盆景） ほうたい（綳帶） ほら（法螺、洞） ほうわう（鳳凰） ほそおもて（顏細）

へ

へや（部屋） へんじ（返辭） へんか（返歌） へた（下手、拙劣、蔕） へつつひ（竈） へど（嘔吐） へち（緣邊） へこおび（兵兒帶） へま（拙策） へなぶり（文戲） へいわ（平和） へんしふ（編輯） へうし（表紙）

と

とりこみ（取込、混雜） とびいり（飛入） とこいり（床入） とだな（戸棚） とまどひ（只惑） とはう（途方） とんぼ（蜻蛉） とあみ（投網） ともあらそひ（友爭） とまりこみ（迫込） とほりすがり（通途） とうざ（當坐） とくり（德利） とうろう（燈籠） とうだい（燈臺） とうき（登記） とうろく（登錄） どこ（何所） とけい（時計） としま（年增）

ち

ちかく（近所） ちかどなり（近隣） ちかまさり（近優） ちん（狆、賃） ちり（地理） ちはう（地方） ちわ（痴話） ちのなみだ（血淚） ちどりあし（千鳥足） ぢびきあみ（地曳網） ぢみ（質素） ちるくせ（散癖） ちりぐせ（同） ちごおひ（稚子生） ちまよひ（血迷） ちらり（瞥然） ちかづき（親近） ちびふで（禿筆） ちくび（乳頸） ちまめ（乳豆） ちばなれ（乳離） ぢさん（持參） ちゆうぶ（中風） ちあん（治安）

り

りくつ（理屈） りあひ（理合） りかい（理解） りつ（律） りえき（利益） りやく（仝） りこう（利口） りし（利子） りあげ（利上） りさげ（利下） りよう（利用） りそく（利息） りんじ（臨時） りん（輪、一輪、二輪） りんご（林檎） りうぎ（流儀） りゆうめ（龍馬） りゆうじん（龍神） りゆうぐう（龍宮） りよひ（旅費） りえむ（離緣）

りやうがん(兩岸)　りつぱ(立派)

ぬ

ぬれで(濡手)　ぬひめ(縫目)　ぬきさし(拔差)　ぬきみ(拔刀)　ぬきて(拔手)　ぬきほ(拔穗)　ぬきあし(拔足)　ぬけめ(拔目)　ぬけば(拔齒)　ぬけあな(拔穴)　ぬけがけ(拔駈)　ぬかぶくろ(糠袋)　ぬかづけ(糠漬)　ぬかみそ(糠味噌)　ぬくめし(溫飯)　ぬくばひ(溫灰)　ぬくもり(溫氣)　ぬかるみ(泥濘)　ぬかり(手落)

る

るゐ(類)　るり(瑠璃)　るつぼ(坩堝)　るす(留守「不在でない」)　るび(振假字)　るゐくわ(類火)　るてん(流轉)　るいせい(累世)　るいけい(累計)

を

をとこで(男手)　をとこづれ(男連)　をとこぎ(男氣)　をとこざかり(男盛)　をとこぶり(男振)　をとこまさり(男勝)　をす(牡)　をんなで(女手)　をんなざかり(女

盛)　をんなづれ(女連)　をそ(惡疽)　をじめ(緒締)　をばな(尾鼻、尾端)　をれ(俺)　をぢ(伯父、叔父)　をば(伯母、叔母)

わ

われほめ(我褒)　われごゑ(破聲)　わけなし(譯無)　わん(椀)　わげさ(輪袈裟)　わりまへ(割合)　わりあひ(割合)　わりあて(割當)　わけまへ(分前)　わけくち(分口)　わるぎ(惡氣)　わるさ(惡作)　わるもの(惡人)　わやく(惡技)　わだかまり(蟠、不平、不服)　わきまへ(分別)

か

からで(空手)　からゐばり(空威張)　かざむき(風向)　かはあさり(川漁)　かげぼうし(影法師)　かげのまひ(陰舞)　かちめ(勝目)　かつて(勝手)　かげぐち(陰口)　かけもち(掛持)　かけあひ(掛合)　かけとり(掛取)　かけね(懸値)　かたりて(語手)　かほみせ(顔目世)　かほつなぎ(顔繫)　かほなじみ(顔馴染)　かた(低當)

かけろく（堵物） かねあひ（兼合） かはせ（爲替） かきとめ（書留） かきおろし（書
下） かきて（書家） かりまき（假卷） かけおち（駈落） かたうど（方人） かくす
べ（蚊燻） かいぶし（同） かどづけ（門附） かどのみいり（門見入） かたわ（不具
者） かたおも（片面） かたはし（片端） かたてま（片手間） かさだか（嵩高） か
さびく（嵩低） かへる（蛙） かうろ（香爐） かんちがひ（勘違） かんごゑ（甲聲）
かぶり（冠） かたり（詐僞者） かんじ（感） かうこう（孝行） かうぶつ（好物） がくか
う（學校） かくご（覺悟） かうえん（講演） かさつ（苛察） がさつ（手荒） からげ（綁）

よ

よく（慾） よぎ（夜着） よめいり（嫁入） よめどり（嫁取） ようす（容子） よばれ
（招待） よち（餘地） よこぐるま（横車） よまひごと（譫言） よわね（弱音） よわ
み（弱身） よわりめ（弱目） よりどり（撰取） よゐん（餘韻） ようし（洋紙） よさ
り（夜）

た

たち（性） だて（裝身） たそく（多足） たが（竹輪） ためいき（溜息） ためなみだ （溜
涙） たはこと（譫言） たはけもの（愚劣漢） たゝりめ（崇目） たなおろし （棚卸）
たびづかれ（旅勞） たまのこし（玉輿） だいなし（臺無） ただ（無價） たし（附加）
たわらごしらへ（俵拵） たちのき（立退） たんき（短氣） たうし（唐紙） だう（堂）
たう（塔） たいかく（体格）

れ

れい（禮） れいぎ（禮儀） れいふく（禮服） れいろ（線路） れんぎ（擂木） れんり
（連理） れいど（零度） れいらく（零落） れう（料） れうり（料理） れんが（連歌、
連柯） れんたい（連帶） れんめい（連名）

そ

そぶり（素振） そつくり（其儘） そらゑひ（空醉） そでぐち（袖口） そですり（袖摺）
そこつ（粗忽） そさう（粗相） そしな（粗品） そまつ（粗末）そうべつ（總別） そつ（過

消）　そうたい（總体）　そうだい（惣代）　それから（爾後）そこびきのあみ（底曳網）
ぞめき（惡騷）　そこら（身邊）　そこう（素行）　そうし（壯士）　そうしき（葬式）

つ

つり（剩餘金）　つれこ（連兒）　つや（通夜）　つかへびと（仕人）　つかひびと（使用人）　つはり（惡疽）　つりあひ（均衡）　つりだい（釣臺）　つかれねむり（勞眠）　つらあて（面當）　つらがまへ（面搆）　つらつき（面附）　つむじまがり（頂毛曲）　つげぐち（告口）　ついで（序）　ついたて（衝立）　づぼし（圖星）つうじん（通人）

ね

ね（値）　ねうち（價値）　ねあげ（値上）ねさげ（値下）ねものがたり（寢物語）　ねいりばな（寢入端）　ねまき（寢間着）　ねびえ（寢冷）ねこみ（寢込）　ねがへり（寢返）
ねぼけ（寢惚）　ねとぼけ（同）　ねぬくめ（寢溫）　ねあせ（寢汗）　ねぢ（螺釘）　ねんぐ（年貢）　ねぎ（葱）　ねぶか（仝）

な

なま（生）　なまゑひ（生醉）　なまなか（愁）　なり（形、容姿）　なまいき（生意氣、牛可通）　なれそめ（馴始）　なじみ（馴染）　なさぬなか（異親子）　なりあがり（成上、成金）　なげうり（投賣）　なんくせ（難癖）　ならずもの（無賴漢）　なじみがひ（名染甲斐）　なだれ（雪崩）　なんぎ（難儀）　なんじよ（難所）　なんだい（難題）

ら

らば（騾馬）　らせん（螺旋）　らいきやく（來客）　らんみやく（乱脈）　らうれん（老練）　らんき（嵐氣）　らいめい（雷鳴）　らくらい（落雷）　らいねん（來年）

む

むり（無理）　むたい（無体）　むしん（無心、依賴）　むなで（空手）　むだあし（空足）
むこいり（聟入）　むこどり（聟取）　むすびめ（結目）　むだ（無駄、徒勞）　むじ（無事）
むつごと（睦言）　むきだし（露骨）　むちう（夢中）　むしづ（氣永）　むしもの（蒸物）
むつき（襁褓）　むいみ（無意味）　むふんべつ（無分別）

う

うつりき(移氣)　うしろで(後手)　うできき(腕利)　うでづく(腕刀)　うめあはせ(埋合)　うつて(討手)　ういらう(外郎)　うぬぼれ(自惚)　うりぐひ(賣食)　うつけもの(空氣物)　うはのそら(上空)　うてうてん(有頂天)　うはさろけ(上融)　うきよがたり(浮世語)　うはきもの(浮氣者)　うどん(饂飩)　うだこと(戲言)　うだつき(同)　うけ(有卦、人望)　うやむや(膠擾)　うんめい(運命)

ゐ

ゐくび(猪首)　ゐなかもの(田舍物)　ゐち(位置)　ゐかい(位階)　ゐどばた(井戸端)　ゐどころ(居所)　ゐずまひ(居住居)　ゐねむり(居眠)　ゐごこち(居心地)　ゐつゞけ(居續)　ゐばり(威張)　ゐがん(胃癌)

の

のろま(野呂魔)　のろけ(惚氣)　のがけ(野懸)　のざらし(野洒)　のぶし(野武士)　のぶせり(野伏)　のりきり(乗切)　のうぜんかづら(淩霄花)　のきのつま(軒褄)

のうれん(暖簾)　のうりつ(能率)　のそ(遲鈍)

お

おん(恩)　おつて(追手)　おどけ(滑稽)　おもはく(計畫)　おもふづ(思圖)　おちど(落度)　おちめ(落目)　おもひきり(思切)　おもひちがひ(思違)　おきうさ(起憂)　おきばな(起端)　おもしろみ(面白味)　おもかくし(面隱)およびごし(及腰)　おほでき(大出來)　おほあたり(大當)　おほぐち(大口)　おだて(煽動)　おきざり(置去)　おほがら(大柄)

く

くちぐせ(口癖)　くちづから(口傳)　くぜつ(口說)　くでん(同)　ぐあひ(具合)　くひあはせ(食合)　くはせもの(詐欺漢)　くたぶれ(草臥)　くるまづれ(車連)　くるまひき(車引)　くるまづかれ(車勞)　くろうと(玄人)　くんじふ(群集)　くわし(菓子)　くわん(管、罐)　くろう(苦勞)　くさめ(嚏)

や

やく（役）　やたら（矢鱈）　やりて（手腕家）　やみつき（深泥）　やくざ（放蕩兒）　やうす（樣子）　やりかた（方法）　やぶれかぶれ（自暴自棄）　やまもり（山盛）　やまばな（山鼻、山端）　やまあさり（山漁）　やまわけ（山分）　やまこ（誇大）　やまぎ（山氣）　やつき（躍起）　やりとり（贈答）　やうき（陽氣）

ま

ませ（早熟兒）　まゝこ（繼子）　まゝはゝ（繼母）　まじめ（眞面目）　まぬけ（間拔）　まうけ（利得）　まもの（魔物）　まなむすめ（愛孃）　まがひぢ（岐路）　まきじた（卷舌）　まけをしみ（負惜）　まちはづれ（町端）　まけのき（負退）　まじなひ（禁厭）　まくらがみ（枕頭）　まちとほ（待遠）　まうでごみ（詣込）　まつりだいこ（祭太皷）　まつち（燐寸）　まとも（正面）　まんぢう（饅頭）　まつろ（末路）　まへかけ（蔽膝）

け

けり（結末）　けが（負傷）　けさう（懸想）　けあげ（蹴上）　けだし（蹴出）　けこみ（蹴込）　けぎは（毛際）　げくわ（外科）　げくう（外宮）　けぎらひ（氣嫌）　けんぶつ（見物）　けんだい（兼題）　けん（拳、劍、縣、權）　げひん（下品）　げば（下馬）　げり（下痢）　げすゐ（下水）　げた（下駄）　けすぢ（毛筋）　けし（芥子）　けたい（怪態、異態、懈怠）　けさまだき（今朝未明）　けんり（權利）　けいはく（輕薄）　けんかう（健康）　けふくわい（協會）　けんちく（建築）

ふ

ふり（風体）　ふらち（不埒）　ふしめ（伏眼）　ふれまひ（饗應）　ふいご（鞴）　ふご（畚）　ふくさ（伏紗）　ふろしき（風呂敷）　ふりぐせ（降癖）　ふりうり（振賣）　ふりさま（降樣）　ふるまくら（古枕）　ふこゝろえ（不心得）　ふしつけ（不躾）　ふしあはせ（不仕合）　ふつごう（不都合）　ふしだら（不仕墮落）　ふなづかれ（船勞）　ぶきみ（不氣味）　ふじみ（不死身）　ふしぜん（不自然）　ふくざつ（復雜）　ふおん（不穩）　ふうふ（夫婦）　ぶどう（葡萄）

こ

こつ（骨法の略） こや（小屋） こぐち（小口） こもち（子持） こつれ（子連） こもつ（捕鳥木） こみあひ（群衆） こみいり（複雜） こはめし（剛飯） こわいろ（聲色） こだはり（障害） こづつみ（小包） こづかひ（小使） こらへじよう（怺情） こゝろづけ（心附） こゝろづから（心柄） こゝろいき（心意氣） こゝろづかひ（心遣、配慮） こまた（小股） こうない（構內） こうゑん（公園） こしかけ（腰掛） こうちや（紅茶） こうひい（珂琲） ごふく（呉服） こたつ（炬燵） ごて（面倒、後手）

え

えて（得手） えもの（得物、獲物） えさ（餌） えな（胞衣） えじき（餌食） えむし（餌虫） えだぐち（枝口） えだぶり（枝振） えだざま（枝樣） えこ（依怙） えん（緣） えんぐみ（緣組） えが（栗毬） えいか（詠歌） えかう（回香） えいこく（英國） えどゑ（江戶繪） えいらくやき（永樂燒） えかうろ（柄香爐） えいらん（叡覽） えきふ（驛夫） えきちやう（驛長） えき（疫） えびちや（海老茶） えんぎ（延喜） えんき（延期） えもん（衣紋） えたい（素性）

て

てま（手間） でし（弟子） でぐち（出口） でいり（出入） でどころ（出所） ててなしご（父無子） てあて（手當） てづくり（手造） てごたへ（手應） てあたり（手銜） てはず（手筈） てをけ（手桶） てくばり（手配） てづから（手自） てがら（手柄） てまへ（手前） てかげん（手加減） てごころ（手心） てほどき（手繙） てばなれ（手離） てくらがり（手闇黑） てちがひ（齟齬） てきゝ（手利） てだすけ（手助） ておち（手落） てんじや（點者） てだて（手段方法） てばなし（手放） であひがしら（出合頭） てうし（調子、銚子） てうわ（調和） てうせん（朝鮮） でんちう（電柱）

あ

あぐら（足坐） あしどめ（足留、禁足） あしてまとひ（足手纏） あしもと（脚下） あゆみならひ（步習） あるきならひ（同） あげあし（擧足） あひて（相手） あひの

り(相乘) あひまひ(相舞) あひづち(相槌) あとしざり(後退) あとひき(後引) あとめ(後目) あとしき(趾敷) あとゝり(後取) あいさつ(挨拶) あいまい(曖昧) あとおし(後押) あがり(終了) あめかせ(雨風) あいだて(愛立) あいそづかし(愛想盡) あせも(汗疣) あせぼ(同) あぶくせに(悪錢) あくじよ(悪所) あくたれぐち(悪垂口) あんま(按摩) あそびづかれ(遊勞) あかはだか(赤裸) あひづ(合圖) あはもち(粟餅) あぢつけ(味付) あぢなめつき(秋波) あばた(痘痕) あさはか(淺薄) あさづけ(淺漬) あをにさい(青二才) あをいきといき(青息吐息) あうぎ(奥義) あたりざはり(當障) あてはづれ(當外) あたりふれまひ(當振舞) あらあら(疎漫) あらかた(大略) あけすけ(暴露) あやふや(曖昧) あきらめ(斷念) あくび(欠伸) あつけなし(無謀、不体裁) あながち(强) あいたて(稚氣)

さ

さし(尺度) さしづ(指圖) さしづめ(差詰) さしあたり(差當) さしむかひ(差向) さしつかへ(支障) さしみ(刺肉) さらへ(復習) さきびき(先引) さきどり(先取) さきばらひ(先拂) さかり(交尾期) さゝい(些細) さしでぐち(差出口) さばく(沙漠) さはい(差配) ざつし(雜誌) さつえい(撮影) さやえんどう(荚豌豆)

き

きこえ(信用) きゝなし(聞樣) きこえをどし(過信) きゝちがひ(聞違) きれめ(切目) きつて(切手) きつぷ(切符) きりび(切火) きりくち(切口) きろく(記錄) きねん(記念) きよう(器用) きりよう(器量、容貌) きげん(機嫌) きぶん(氣分) きのどく(氣毒) きしぐひ(岸杭) ぎす(虫名) ぎり(義理) きつかけ(機會) きぐらゐ(氣位) きまぐれ(氣紛) きせん(貴賤) きつけ(氣付藥) きふこう(急行) きゆうくつ(窮屈) きかい(機械) ぎえん(義捐) きやうだい(兄弟、鏡臺)

ゆ

ゆとり（餘裕）　ゆぐ（湯具）　ゆだうふ（湯豆腐）　ゆひ（遊牝）　ゆびわ（指環）　ゆひなう（結納）　ゆゐごん（遺言）　ゆきがかり（行掛）　ゆきだふれ（行倒）　ゆうれい（幽靈）　ゆうすい（幽邃）　ゆでまめ（煠豆）　ゆつくり（寛裕）　ゆつたり（悠々）　ゆすり（强請）　ゆくゆく（後來）　ゆだん（油斷）　ゆうわく（誘惑）

め

めす（牝）　めがし（芽樫）　めうど（芽獨活）　めまひ（眩）　めませ（目交）　めこぼし（目洩）　めうつり（目移）　めきゝ（目利、鑑定）　めのどく（目毒）　めじろおし（目白押）　めづかひ（目遣）　めくばり（目配）　めくり（捲紙）　めんばれ（面晴）　めんだう（面倒）　めいしよ（名所）　めいば（名馬）　めしびつ（飯櫃）　めいわく（迷惑）　めをと（夫婦）　めいし（名刺）　めんどり（雌）　めいぢ（明治）

み

みきり（見切）　みこみ（見込）　みなし（見様）　みおとり（見劣）　みつもり（見積）　みじめ（悲慘）　みゆづり（見讓）　みえ（外見）　みごしらへ（身拵）　みじたく（身仕度）　みびいき（身贔負）　みのしろ（身代）　みなぎは（水際）　みちごのみ（道好）　みちぐさ（道草）　みやげ（家苞）　みちづめ（道詰）　みだれさま（亂様）　みづみまひ（水見舞）　みれん（未練）　みりん（味醂）　みかん（蜜柑）　みそ（味噌）

し

しち（質、典物）　しな（痴容）　しにせ（老舗）　しろうと（素人）　しぶり（仕振）　しぶとさ（執拗、偏固）　しひな（粃）　しこ（四股）　しめきり（締切）　しうち（仕打）　しりごみ（尻込）　しびれ（痺）　しめやか（親密）　しとやか（優雅）　しくじり（失敗、失策）　しぐさ（行爲）　しらふ（素面、不醉）　しげしげ（頻繁）　しやれ（洒落、戯言）　しちぐさ（質草）　しにそこなひ（死損）　しめん（死面）　しにめ（目死）　しにばえ（死榮）　じこく（時刻）　じかん（時間）　しんぶん（新聞）　してん（支店）　しやくり（吃逆）　したゝか（强甚）　しんせつ（深切）

ゑ

ゑし(繪師)　ゑのぐざら(繪具皿)　ゑりあし(襟足)　ゑひどれ(醉漢)　ゑづき(吐氣)　ゑんりよ(遠慮)　ゑんそく(遠足)　ゑんま(閻魔)　ゑんいうくわい(園遊會)

ひ

ひとごみ(人込)　ひとだかり(人集)　ひとつどひ(同)　ひとひとしげ(人々氣)　ひさしぶり(久振)　ひさしげ(久氣)　ひやうし(拍子)　ひるま(晝間)　ひかへばしら(控柱)　ひかへづな(控綱)　ひかへめ(控目)　ひきあて(抵當)　ひきぼし(引干菜)
ひきあひ(引合)　ひきあはせ(同)　ひよりぐせ(日和癖)　ひねなすび(古茄子)　ひねりもち(拈餅)　ひきがへる(蟇)　ひねりぶち(拈文)　ひとりねむり(獨眠)　ひとりゑみ(獨笑)　ひなぶり(火弄)　ひなぐさみ(火遊)　ひとくは(一鍬)　ひとはしり(一走)　ひとかたげ(一樻)　ひつそり(闃然)　ひだう(非道、ひどい目などに轉ず)
ひどきめ(痛目)　ひんぷ(貧富)　びいる(麥酒)　ひやうしぎ(拍子木)　びやうき(病氣)　ひふ(被布)

も

もの(腫物)　ものずき(物好)　ものわり(物撰)　ものまね(物眞似)　ものごり(物凝)　もやう(模樣)　もん(紋)　もんどり(漁具)　もぎだう(沒義道)　もぎどく(仝)
もつと(今少)　もそつと(仝)　もちつと(仝)　もうれつ(猛烈)

せ

せめ(責任)　せめく(責苦)　せりふ(臺詞)　せりうり(糶賣)　せだか(背高)　せだけ(背丈)　せぼね(背骨)　せおひこみ(背負込)　せおひなげ(背負投)　せいじん(成人)　せいし(誓詞)　せいもん(誓文)　せいごん(誓言)　せもつ(施物)　せぎよう(施行)　せともの(陶器)　せん(膳、禪)　せゐ(所爲)　せわ(世話)　せかい(世界)　せたい(世帶)　せいらく(捜査、穿鑿)　せいう(晴雨)　せいき(精氣)　せいたく(贅澤)　せいごう(精好織)　せりだし(迫出)　せつた(雪踏)　せきゆ(石油)
せきひ(石碑)　せぎり(瀬切)　せぶみ(瀬踏)　せだうか(旋頭歌)　せいぞう(製造)
せいぶん(成分)　せんだん(栴檀)　せんりう(川柳)　せんじや(撰者)　せんろ(線

路）　せんにん（仙人）　せんぐう（遷宮）　せんげ（遷化）　せんし（戰死）　せんざい（前栽）　せいきふ（性急）　せつなるこゝろ（痛切心）　せんぎ（詮議）　せんだく（洗濯）　せんめん（扇面、洗面）　せんだう（船頭、先導）　せんだち（先達）　せうくわ（消化）

す

すで（素手）　すあし（素足）　すげ（素氣）　すめん（素面）　すがほ（素顏）　すぐせ（宿世）　すてうり（捨賣）　すてね（捨價）　すてせりふ（捨臺詞）　すゑめし（餕飯）　すいあまい（酸甘）　すてき（素適）　すそわけ（裾分）　すそもやう（裾模樣）　すそはり（裾張、淫奔）　すゑおき（据置）　すどほり（素通）　すゐしや（水車）　すべり（辷）　すぐき（酢莖菜）　ずけり（明白、判然）　ずくぬれ（雫濡）　すゞめおし（雀押）　すゞなり（鈴生）　すうき（樞機）　すゐしやう（水晶）　すつかり（全部）　すけ（助）　すつきり（奇麗）

八、新歌語の動詞

○はめて

水に身をはめても今宵おもしろき心は何のなさけなるらん　　言道

麻行の下二段活で、メ、メ、ム、ムル、ムレと働く、はまるは、四段活の良行である。

○あやつる

はね釣瓶あやつる業を厭ひては火も手してこそ取るべかりけれ　　仝

人を操つる、（翫弄する）操つられ居る、など。

○せがみて

强ひて、請ひ求むることで、ねだるに同じきも、嫉（ネタ）ると紛らはしい、心すべきである。

○むつがりて

無理を云ふこと、むづがるともいふ。

○ありありて

限なく世にありありて在の果思ひこそやれ如何なる身と　仝

既に、なりなりてといへば、論はない。

○あたる

ねぶりつゝ照日にあたる水際の鷗におなじ老のわざかな　仝

このあたるは、暖まるにて、物の當るとは別意義で、火にあたると、火にあてるとは又別である。

○あまえて

惜しとのみ偏にいへば中々にあまえて花のちりに散るらん　仝

あまえは、媚ぶることで、あまやかし、あまえ泣く、などある。

○なつけて

おのれさへ骨身に背く世中を人なつけてと思ひつる哉　仝

手馴けても、同じである。

○いきり　こなし

いきり立つ馬をやはしていと妙に乘こなし行く鞍の上の人　作者不知

いきり卵といふがあり、こなしは、上手にこなすこと、取扱ふことである。

○すぼめ

吹き靡けしばしゆるべぬ秋風に身をすぼめたる窓の若竹　言道

○おきならべ

儺の川の汀の鴨のともねぶり置ならべたるものと見るまで　仝

○だしたてゝ

待渡る高嶺の月を出したてゝしぞき顔なる夜々の山の端　仝

○たぐひて

淺茅生につまとたぐひて居る雉の景色とりても立てる早蕨　言道

○**やりたらぬ**（打消）

人に物を吾やりたらぬ心から乞ふ身にやがて成らむとすらん　仝

物足らぬ、飽足らぬ、呑たらぬ、食たらぬ、乗たらぬ、見たらぬ、爲たらぬ、言たらぬ、啄たらぬなど。

○**へつらふ**

鄙に生ひてへつらふことも知らぬ身は都ぶりには事ちがひけり　仝

へつらひ者、へつらひ業、へつらひ樣、など。

○**そばへて**

流れ來る花に浮びてそばえては又瀬をのぼる春の若鮎　仝

猫のそばえ、そばゆる犬、など。

○**こらへず**（打消）

長き夜の嵐もやがて止むものを暫しこらへず散さくらかな　仝

こらへえぬ、こらへかね、など。

○**あたまれて**

何故に風の神にはあたまれて散らさでおかぬ櫻なるらん　仝

にらまれて、そねまれて、にくまれて、など。

○**ほそめて**

鶯のつばさ細めて行き通ふ花のうちこそ行かまほしけれ　仝

目をほそめて、聲をほそめて、など。

○**おしたちて**

世の中をおしたちてのみ在むよりかげめ安かる花の木がくれ　仝

おしたち在る、おしたちて居る、など。

○**こころづきたる**

いつよりか入相の鐘は鳴りつらん心づきたる果の一こゑ　仝

心づき、心づく、心づくる、心づかず、心づけ、など。

○ちかづけて

まどろめば野を近づけて枕邊にある心地するすみれ早蕨　仝

近づけん、近づき、近づく、近づくる、近づけれ、など。

○あてゝ

秋の雨のさびしき今日を友もなし海苔を火にあてゝ獨こそ飲め　仝

日にあてて干す、日にあてゝかわかす、など同じである。

○うはとろけして　しまず　ぬかり

何事も心にしまず山邊の道のぬかりの上とろけして　仝

上とろけは、上とけである。身にしまず、身にしみて、ぬかるみ、などある。

○けしきにこめて

花折りて夕川渡る少女らを景色にこめて立つ霞かな　仝

景色に罩めて、いと妙である。

○かすみにそへて

春の野に橋うちわたる吾身をば霞にそへて人や見るらん　仝

雨にそへて、雪にそへて、など。

○こころにうゑて

梅の花思ふばかりの枝の樹を心に植て見る寢ざめかな　仝

心に植ゑて、最もよい。

○やせさらぼへる

あはれみて折る人もなし山里のやせさらぼへる柴垣の梅　仝

やせさらばふは、古言なれど、新しく用ゐらる。

○みをやる

散れば疾く水に浮べて行く花に死ねば身をやる野邊をこそ思へ　仝
心やる、氣をやる、思をやる、など。

附語彙

い　いぢめ（虐）　いらつ（焦燥）　いらつく（仝）　いきづまる（息詰）　いきる（勢立）　い
ぶす（燻）　いこす（起火）　いため（痛）　いたみいる（痛入）　いすぶる（搖振）　いた
ぶる（痛振此ハ古語）　いひさす（云捨）　いぢつく（不快）

は　はめて（投、嵌）　はかす（捌）　はやる（惱此ハ古語）　はやまる（逸）　はたく（拂落）
はしやぐ（競出）　はにかむ（羞耻）　はりたふす（打倒）　はちきる（張切、溢張）　は
なじろむ（鼻白む、耻かしがること）　はかながる（儚）　はぐ（剝）　はぐれ（離落）
はづむ（隆昌）　ばれて（露現、發覺）　はだかる（立はだかる）　はだけて（放開）

に　にがる（苦）　にがりきる（苦切）　にじる（躙）　にじむ（浸潤）　にぶる（鈍）

ほ　ほたへ（戯）　ほそめ（細）　ほかす（放置）　ほぐす（絮）　ほぐらす（仝）　ほぐらかす
（仝）　ほろゝぐ（分解）　ほせくる（掘散）　ぼかす（淬）　ぼけて（恍）　ほうけて（恍
惚、老耄）　ぼれて（耄）　ほのめかす（令知）　ほざく（呟）　ほどく（解）

へ　へたる（下居）　へたばる（屈居）　へづる（奪）　へす（減）　へる（仝）　へがす（剝）
へされ（被減）　へばりつく（密着）

と　とちて（退、販走）　とぼけて（不知容）　とりつめて（詰責）　どぎる（潔出、抽出）　ど
もる（訥吃）　とぼす（點火）　とらまへて（捉）　どなる（大喝一聲）　とがらす（令鋭）
とる（釋き様、わるくとる）

ち　ちがる（手切、果物瓜などを）ちびる（禿）　ちがふ（違）　ちばしる（血走）　ちまよふ（血迷、周章）　ちゑづく（智惠附）　ちぢかまる（縮身）　ちぢこまる（縮身）

り　りきみ（力味）　りきむ（仝）　りぐはす（利喰す）　りきばる（力張）

ぬ　ぬかる（不注意）　ぬくもる（温）　ぬすくる（塗附、轉嫁）

を　をれて（讓步）　をがみたふす（拜倒）　をこめく（干涉、自慢）　をごめく（蠢）　をこする（誘）　をりしく（折敷）　をさまりかへる（泰然自若）

わ　わめく（叱呼）　わぐね（綰）　わらはかす（令笑）　わきまへて（辨出）　わづらふ（病）

か　かはす（避）　かばふ（庇、掩護）　かぶる（食、冠、被）　かぶりふる（冠振）　かがむ（屈）　かまふ（搆、干涉）　かじけて（寒屈）　かきこむ（搔込）　かきむしる（搔捞）　からかふ（揶揄、嘲弄）　かさばる（嵩張）　かつえて（飢苦）　かゝづらふ（關與）　からげて（紮）　かててくはへて（搗加）　かんばしる（甲走）　かたづのむ（堅唾呑）　からむ（絡）　かくまふ（隱慝）

よ　よばれて（被招）　よけて（避）　よろけて（跚）

た　たす（足、附加）　たぐる（手操又咳息苦）　たしなめて（令懲）　たがる（望求）　たかる（集）　だまる（默止）　だく（抱擁）　だます（欺瞞）　だしぬく（出拔）　だるむ（緩）　だてする（粧身）　だてこく（仝）　ためらふ（躊躇此ハ古語）　たてづく（楯附、敵對）　だまされ（被騙）　だます（騙）　たゝむ（疊む）

そ

そぐはぬ（不似合） そしらぬ（素不知） そりかへる（反身） そばえて（戯） ぞめく（騒） ぞわつく（仝） そしらる（被謗） そそる（唆） そそつく（蒼皇）

つ

つく（吐） つくる（扮） つめる（爪入、拈） つねる（捻） つるむ（交尾、尾孳） つくばふ（蹲居） つぎこむ（繼込） つきこむ（突込） つきあげ（突上） つきかけ（突掛） つけこむ（附込） つけいる（附入） つめこむ（詰込） つきだす（衝出、搗出） つぶる（瞑目） つりあふ（釣合、平均） つるべうつ（釣瓶打） つぎたす（繼足） つかまへて（捕） づらす（令降） づらかす（仝） つかむ（摑、一攫千金） つかへて（撑） つむる（詰） つまむ（撮）

ね

ねこむ（寢込） ねいる（寢入） ねまる（寢間入） ねしづむ（人定） ねぎる（値切） ねぶる（甜） ねだる（强請） ねぢこむ（捻込） ねかす（令寢） ねぢむく（捻向）

な

なだめて（慰撫） なつけて（馴付） なぐる（毆打） なぶる（嬲） なまけて（懶惰） なする（塗付） なすくる（仝） なすりつくる（仝） なぐれて（散乱）

ら

らくする（樂） らうえいして（朗詠して）

む

むしる（捞） むかつく（憤怒） むづがる（怨嗟） むつるゝ（睦、コレハ古語） むりいふ（無理云）

う

うづく（痛勃） うめく（吟） うなる（呻吟） うなづく（首肯、頷） うつむく（俯） うなさる（魘） うつらぬ（不相應） うたぐる（疑惑） うだつく（戯言） うろたへて（周章） うながさる（被促） うちくつろぐ（寛） うらをかく（裏搔） うけて（得信用）

ゐ

ゐばる（威張） ゐざる（居去、躄） ゐならぶ（居並） ゐつゞけて（居續） ゐなほり

て(居直)

の　のばす(逆上)　のけて(除)　のたうつ(野太打、轉々苦)　のさばる(延張)　のけぞる(仰反)

お　おだてて(煽動)　おきざる(置去)　おびやかす(脅迫)　おちつく(安堵)　おしたちて(押立)　おぼふ(埋むること)

く　くどく(口説)　くくる(縛括)　くすぐる(擽)　くちばしる(口走)　くすぶる(燻)　くすばる(仝)　くねる(曲コレハ古言)　くさす(貶)

や　やく(嫉妬)　やめて(止、疾)　やつてのけて(行了)　やきもきして(焦慮)　やくざする(惡技する、やくざものなど)

ま　まざる(混交)　まぞふ(償)　ませかへす(混返)　まくしたてて(捲立)　ませて(大人振)　まごつく(迷顏)　まがさす(魔附)

け　けやす(消)　けなす(貶)　けしかけて(指嗾)　けつまづく(躓)　けしきばむ(怫然)　けたるみて(氣倦)　けころばす(蹴轉)　けたふす(蹴倒)

ふ　ふさぐ(欝)　ふてて(恨憹、默、恨逆)　ふくれて(脹、不滿)　ふすぶる(燗)　ふきだす(噴飯)　ふざけて(痴戯)　ふらつく(蹣步、眩惑)　ふたする(蓋)　ふんばる(踏張)　ふんぞる(踏反)　ふさがる(塞)　ふづくむ(怨顏コレハ古言)　ふくらます(脹)

こ　こまる(困)　こねて(揑)　こなす(消化、扱)　こく(放、尿、屎、屁などに)　こく(扱 稲などに)　こたへて(應)　こらへて(怺、免)　こかす(斃、轉)　こする(摩擦)　こだは

る（支障）　こぢれて（紛料）　こそばる（擽）　こきつかふ（虐使）　こきおろす（罵倒）　こはがる（恐悸）　ころがる（轉倒）　こゝろづく（心附）　こみあげて（鳴咽）　ごてて（面倒）　こせつく（屑々、干渉）　こはばる（硬）　こげつく（焦附）

え　えづく（吐）　えらばる（尊大、自尊、倨傲）　えにつきて（餌盡）

て　てれて（羞耻、自耻）　でれて（纒綿）　てまねく（手招）　てだすけて（手助）　てつだひて（手傳）　てなづけて（手馴付）　てばなして（手放）　てばなれて（手離）

あ　あせる（焦心）　あきれ（惘）　あをる（呷）　あぐむ（屈托）　あやす（操縦）　あたる（喝采）　あがく（足搔、踠）　あなづる（侮蔑）　あやつる（操）　あてて（博利）　あまへて（乞愛、請憐）　あまへかす（爲愛、施愛）　あまやかす（仝）　あたまれて（被忌）

あおむく（仰視、仰向）　あぐねて（屈托）　あざわらふ（嘲笑）　あきなふ（商）　あをざめて（菜色、無血色）　あがつて（逆上）　あたふたする（倉皇）

さ　さする（摩擦）　さらふ（誘拐、浚、復習）　さらへて（仝）　さかだつ（逆立）　さしでて（差出）　さげすむ（蔑視）　さいなむ（呵責）

き　きやす（消）　きしむ（軋、氣滲）　きばる（氣張、努責）　きめて（決定）　きめつけて（詰責）　きはだつ（際立）　きをくさらす（落膽、意氣銷沈）　きをもむ（氣揉、心配）

ゆ　ゆでて（煠）　ゆはへ（結）　ゆがめ（歪）　ゆさぶる（振搖）　ゆすぶる（仝）

め　めぐ（破毀）　めくる（剥、捲）　めかす（扮、裝）　めだつ（目立）　めくばる（目配）

めもまふばかり（目舞斗）　めりこむ（破込）

み　みそめ（見初）　みくびる（見下）　みそれて（見外）　みつめ（見詰、凝視瞶）　みたす（充、滿足）　みてみぬふり（見而不見樣）　みじろぐ（瞶視）　みせびらかす（誇示）

し　しぶる（澁滯、逡巡）しりごむ（尻込、逡巡）　じれて（焦燥）　じらす（令焦）　しくじる（失敗）　しめて（締、閉戶）　しなび（萎）　しわびて（爲皺）　しびれ（痺）　しみたれて（不潔）しやれて（洒落、痴戲）　しやくる（泣）　じやくる（嗚咽）　しよげて（慚）しかめる（顰）

ゑ　ゑどる（彩色）　ゑんず（怨）　ゑらばる（威張）

ひ　ひる（噴、放）　ひねる（捻）　ひねて（古色）　ひづむ（歪、窊）　ひやかす（冷笑）　ひきずる（引摺）　ひきぬく（引拔）　ひこづる（引摺の古言）　ひきたくる（引手繰）　ひとませもせず（不人交）

も　もぐ（剝取）　もぐる（潛隱）　もがく（踠）　もだへて（煩悶）　もどる（戾）　もだもだする（煩悶）　もだつく（仝）　もぞもぞする（躊躇）

せ　せる（糶）　せがむ（要求）　せぶる（求取、强要）　せぐる（喘繰）　せたる（要求）　せたぶる（强請）　せりつめて（迫詰）　せりあぐる（糶上）　せく（急）　せせる（搜）　せきこむ（迫込）

す　すく（好、嗜）　すくむ（畏縮、竦）　する（掏摸）　すゝる（啜）　すさる（退）　すぼむ（窄）　すぼめて（仝）　すぼる（仝）　すぼまる（仝）　すかす（透、賺）　すがめて（眇）ずくぬれて（雫濡）　すかしなだめて（賺慰）

九、新歌語の形容詞、副詞

○きはきはしく

雨晴れし木間の日影庭の面にきはきはしくも暑き今日かな　言道

之は、正しき語で、シ、シキ、シク、シケレ、と活らく、古來用ゐた語で、言道のみが使つたものでないに、餘り、用ゐぬのは何故か。

○よろぼはしく

霜さむき木葉の下のきりきりすよろぼはしくぞこゑもなり行く　仝

これは、弱ぼはしくであつて、活用は、きはきはしくと同じで、よろは、弱にて、ぼはは、延語である。故に、よろよろしくと云つても宜い。

○おだしく

これは、古來用ゐてをる、穏しくである。

○あまりしく

あまりしく賑はゝしくて櫻花さひしく見まくほしき陰かな　言道

あまりしく人のをしめば散花にわろび顔なる春の山風　仝

これは、アマラン、アマリ、アマル、アマレ、と活く良行四段の動詞が、あまりと云ふ名詞や、副詞になつて、更に、形容詞になつたものであるが、あまりに用ゐられない、呵々。

○あなづらはしく

花ちると追へとおへども近く居てあなづらはしく鳴く雀哉　仝

あなどるが、あなづるに轉じ、るをらはに延べて、形容詞となつたものである。猥らはしく、安らはしく、などあらう。

○いからしき

いからしき山風たてば櫻花音ばかりにも恐れてぞ散る

怒るといふ、良行四段活の動詞の、怒らむを、形容詞としたもので、いからはしくと延べても宜い。

○たかくたかく

人心高くたかくと成行けは山より外に見るものぞなき　　曙覽

附　語　彙

い

いまいまし(忌々)　いたはし(恤)　いたまし(仝)　いたいたし(痛々、悽愴)　いきだはし(息怠)　いそいそし(勤々)　いとし(愛)　いからし(怒)　いかつし(嚴)　いぢらし(憫)　いらだたし(焦)　いらいらし(焦々、稜々)　いといと(最々)　いきいき(新鮮)　いやいや(厭々)　いちいち(一々)　いひいひ(云々)　いそいそ(急遽、得々)

ろ

ろくに(碌)　ろくろく(碌々)　ろくさま(碌樣)

は

はしこし(速)　はかばかし(捗々)　はなばなし(花々)　はればれし(仝)　はしたなし(揺)　はつきり(判然)　はきはき(蹶々)　はたはた(軒者羽)　ばたばた(拍々)　ばらばら(剝々)　はらはら(潜々)　ばらばら(稀疎、悚々)　ばちばち(仝)

に

にくにくし(惡々)　にがにがし(苦々)　にぎはし(賑)　にこにこ(莞爾)　にたにた(仝)

ほ ほろり（泣然） ほそくほそく（細々） ほれぼれ（惚々） ほそぼそ（細々） ほろほろ（剝々） ぼろぼろ（零々） ほかほか（朗々） ほくほく（欣々） ほたほた（仝） ほかほか（外々） ぼくり（拆然）

へ べつに（別） へたへた（屁太々々） べたべた（屏々） へとへと（反吐々々） へなへな（仝） へどもど（慄々） べそべそ（泣々）

と とほどほしく（疎遠） とびとび（飛々） とぼとぼ（仃々） どきどき（愕悸） どくどく（滾々） どぐろく（惡黑）

ち ちかしく（近） ちくちく（徴々） ちびちび（少々、瑣々） ちらちら（點々） ちりぢり（陸離） ちりちり（蹙々、悉縮） ぢくぢく（恤々、洫々）

り りりし（凜々） りちぎらし（律義） りこうらし（利口） りくつらし（理屈）

ぬ ぬくぬくし（溫々） ぬけぬけし（横看） ぬるぬる（滑々） ぬらぬら（仝） ぬくぬく（溫々、衔々） ぬけぬけ（慢々）

を をぞまし（悉） をこがまし（烏滸） をとこらし（勇壯） をづをづ（忸怩） をちをち（碌々） をぞをぞ（恐々） をろをろ（悸々）

わ わかわかし（若々） わざとらし（態） われがまし（我） わざとがまし（態） わるわるし（惡々） わなわな（悸） わざわざ（態々） わるわる（憚顔） わやわや（許々、嘈騷顔） わいわい（聲多顔）

か　かはゆし（可愛）　かたくなし（頑）　かろがろし（輕）　かどかどし（稜々）　かひがひし（活潑）　かぼそし（細、纎弱）　かたがた（方々、旁）　かくかく（斯々）　かうかう（仝）　かちかち（戛々）　がりがり（皷齗）　からから（呵々）

よ　よそよそし（餘所、外）　よくよく（克々）　よしよし（可々）　よちよち（徐歩、蹣跚）　よりより（寄々）　よたよた（蹣跚）

た　だゆし（撓）　だるく（倦怠）　たよたよし（婀々）　たけたけし（猛々）　たまらなく（不耐）　ただただ（唯々）　たかくたかく（高々）　たびたび（度々）　だいだい（代々）　たぶたぶ（瀰々）　だらだら（津々）　たあいなし（他愛無）　だらしなし（不取締）　たどたどし（辿々、蹣躚）　たぢたぢ（逡巡）　たらたら（點滴）

そ　そゝかし（匆々）　そらそらし（空々）　そゞろはし（漫）　そろそろ（徐々）　ぞろぞろ（陸續）　そよそよ（習々）　そこそこ（其所々々）　そはそは（倥々、卒々、不落着顏）　そつくり（全然）　ぞくぞく（躍々、淋慄）　そそくさ（匆々）　そろり（徐）

つ　つらし（無情、厭苦）　つらにくし（面疾）　づつなし（無術）　つよくつよく（强々）　つひつひ（遂々）　つねづね（常々）　つい（不圖）　つまり（畢覚）　ついつい（行顏）　つかつか（咢々）　づけづけ（仝）　つきつき（岑々）　づたづた（寸段）　つるつる（滑利）　つましく（節約）　つつましく（謹直）　づべこべ（彼此）

ね　ねぐるし（寢苦）　ねづよし（根强）　ねちねち（綏々）　ねばねば（粘々）　ねとねと（仝）

な　なまなまし（生々）　なれなれし（馴々）　なみだくまし（涙含）　ながくながく（長々）　ながながし（仝）　なかあしく（不和）　なかあしけし（仝）　なになに（何々）　なみなみ（盈々）　なよなよ（婀々）　なうなう（喃々）

ら らちもなし（埒） らつしもなし（仝） らつちもなし（仝） らくらく（樂々）

む むごし（酷） むごたらし（慘酷） むざむざ（無駄々々、無殘々々） むづがゆし（徒痒） むさくるし（不潔） むさくろし（仝） むつかし（至難） むくむく（疣々、勃然） むつくり（勃然） むきむき（脱々、向々） むづむづ（勃々、不止得顔） むかむか（懊憹、憤怒顔） むだむだ（駄々） むらむら（怖悅、勃々）

う うとうとし（疎々） うひうひし（初々） うとうと（昏々、眠々） うつうつ（仝） うそらし（啌） うらさむし（裏寒） うかうか（放心） うすうす（薄々） うだうだ（輕口） うひに（初） うきうき（浮々） うそうそ（放心） うぢうぢ（忸々） うづうづ（勃々） うろうろ（徘徊） うるさく（執拗、强烈）

ゐ ゐづらし（居苦） ゐづよし（居强、安心）

の のぶとし（膽太） のこのこ（蝸々、氣樂顔） のむき（呑氣、同前） のびのび（伸々、舒暢） のらのら（怠顔） のろのろ（仝） のちのち（後々） のさのさ（呑平） のそのそ（仝） のぞましく（希望） のしのし（悠然歩形）

お おもおもし（重々） おもたし（仝） おとなし（静） おぞまし（愚） おもただし（面正） おびただし（夥） おそるおそる（恐々） おひおひ（追々） おづおづ（悚々） おどおど（仝） おちおち（偷々） おろおろ（憂懼） おめおめ（阿容々々）

く くどく（諄々、絮々） くどくくどく（仝々） くさくさ（苦差々々、悄々） くよくよ（憂顔、忡々） くだくだし（管々、諄々） くすくす（竊笑） ぐづぐづ（依々） くつ

きり（劃然） ぐつたり（崩然） ぐなぐな（軟々） くらくら（眩々） くりくり（盱々） くるくる（宛轉） くれぐれ（懇々）

や ややこし（紛雜） やぐさし（燒臭） やつやつし（徵々） やぎろし（紛々） やまやま（山々） やきやき（八釜敷云顏） やかまし（彌嚚） やはり（矢張、猶） やはか（爭でか） やみやみ（暗々、止々） やはやは（柔々）

ま まぶし（燦） まぎらし（紛） まこどらし（眞實） まざまざし（仝） まめまめし（忠實） まごまご（迷顏） まひまひ（舞々） まちまち（區々） まじまじ（耿 、默々）

け けうどし（氣疎） けだかし（氣高） けぶたし（煙當） けたたまし（高音） けばけばし（華美） けしけし（消而消） げふげふし（業々）

ふ ふてふてし（不從顏、却怒顏） ふらふら（放心、飄々） ぶらふら（仝、緩縦） ふどくふどく（太太） ふい（不意） ふさふさ（茸々） ふはふは（徬徨） ぶるぶる（戰慄）

こ こはし（恐、剛） こはごはし（仝） こそばゆし（擽、心耻、裏愧） ことごとし（仰山） こゝろおきなし（滿足） これこれ（是是） ころころ（轉々） こせこせ（屑々） こそこそ（狐鼠々々） こてこて（槊々） こりこり（懲々） ころり（轉然）

え えぐし（酷、 ） えらし（偉大） えごき（荏辛）

て てごはし（手剛）てぬるし（手緩） てくてく（歩形） てかてか（瑩々） でれでれ（綢繆）

あ あぶなし（危） あらあらし（疎暴） あくどし（執拗） あざどし（不敏） あぢよし（味

善）あまりしく（餘）　あなづらはしく（侮顔）　あいくるしく（愛苦）　あるべかしく（可有顔）　あまあま（甘々）あきあき（飽々）　あとあと（後々）　ありやうは（實は）　あぶあぶ（喚喝）　あかあか（赤々）　あさあさ（淺々）　あさはか（淺墓）　ありあり（明白）

さ　さやさや（絣綜）　さつぱり（脫然）　さぶしく（淋）　ざぶざぶ（渉水顔）　さいさい（度々、際々）　さらさら（更々）　さめざめ（潸然、涔々）　さてさて（扨々）　さてもさても（仝）　さもさも（然々）　さぞさぞ（嘸々）

き　ききぐるし（聞苦）　ききづらし（仝）　きらきらし（燦々）　きはきはし（判明、亮然）　きなきな（憂々、快々）　きやきや（絞々）　きつと（屹度）　ぎくぎく（責々）　きしきし（軋々）　きちきち（秩々）　きよろきよろ（徬徨）

ゆ　ゆら〳〵（搖顔）　ゆさ〳〵（仝）　ゆうゆう（悠々）　ゆくゆく（往々）

め　めめし（女々、優柔）　めざとし（目敏）　めまぐるし（眩目）　めそめそ（歔欷）　めきめき（追々、又音響）　めいめい（各自）　めりめり（破音）　めらめら（燃様）

み　みぐるし（見苦）　みづくさし（薄情）　みづみづし（瑞々）　みだりがまし（猥）　みちみち（道々）　みすみす（見々）　みづおもしろし（水面白）　みしみし（宰々）

し　しらじらし（白々、不知顔）　しくしく（唧々、啾々）　しこしこ（咬顔）　しとしと（津々）　じりじり（浸淫）　じとじと（津濕）　じろじろ（輪々）　しぶしぶ（澁々）　しらずしらず（不知不知）　しつかり（確然）　じくじく（涓々）　しぶとし（頑）　しくねし（拗）

ひ　ひどし（酷烈）　ひどく（仝）　ひつこし（執念深）　ひだるし（脾綏、飢、拐腹）　ひもじく（仝）

ひよわし（弱体）　ひきくひきく（低）　ひくくひくく（仝）　ひろくひろく（廣濶）　ひぞくひぞく（酷々）　ぴかぴか（泛艶）　ぴくぴく（惕々）　ひりひり（滲々）　ひそひそ（秘々）

も　もつたいらし（勿体）　もつともらし（道理）　もごかし（焦慮）　もものし（大形、仰山）　もともと（元々）　もぐもぐ（遲々）　もだもだ（悶々）　もちもち（忸々）　もやもや（漠々、濛）

せ　せまし（狹）　せせこまし（仝）　せつなし（苦惱）　せちがらし（世路辛）　せいせい（精々）　せきせき（急々）　せかせか（役々）　せつせつ（精々）

す　すばらし（素晴）　すげなし（素氣無）　すばしこし（素敏）　すばやし（素早）　するする（辷々）　ずきずき（痛顫）　ずんずん（寸々又順々）　ずたずた（斷々）　すれすれ（摩々）　すごすご（悄々）　すたすた（蹶々）　すべすべ（滑澤）　すやすや（靜々）　すらすら（流暢）　すくすく（矗々古言なり）

十、新歌語の感歎詞

○あら

死にともなあら死にともな死にともな惠を受けし君を思へば　　忠勝

あら、ああら、など、平語に使用せられてをるが、歌語としても、更に差支あるまい。この歌なども、文雅に疎き武將の詠として、眞情流露、人を動かすものがある。之を見ても、歌は眞實であらねばならぬ事がわかる。

○あな　あなや

人見れば爪とがらせてとり喰はむあな恐ろしの世にこそ有けれ　　作者不知

あなあな、あなやさばかり、あなうたて、あな美し、あな面白し、あな嬉し、など。

○いてまこと

いでまことさらずば何に長からむあくがれよとの春日也けり　　言道

いでまこと如何なる人の寫すとも描くは劣る撫子の花　仝

いでは、獨立せる感動詞にて、既に、いでそよ人を忘れやはすると、古歌にも用ゐてをるから、此所に事新しく云ふまでもあるまい。

○いざ　いざや

これも、同じである。

○いさ　いな　あはれ　いかに

これも、同じである。

○やよや

やよや待て聲惜みする子規我か知る汝を忘るべしやは　作者不知

これも、感動詞で、又呼かけである。

○なりな

今の身はよそ人なりな三十ぢにも我ならざりし昔思へば　言道

なは、附屬感動詞で、よき事よな、移りにけりな、契り來ななど、古來用ゐられてをる。

○えいえい　えやをゝ　やいやい　やれやれ

これも、平語であつて、歌語として宜い。

○あゝ　をゝ

あゝと云ひて涙ぞ流す湊川みはかの文字は讀み得ざる子も　曙覽

あないたし、あなつめたしは、あゝいたし、あゝつめたし、又、あゝ苦し、あゝ嬉し、と同じでなければならぬ。

○おう　をい　をうい

おうと云ひて尙門の戸を明けざるは雪拂ふ間を待つにや有らむ　作者不知

神前に於ける、降神のおうと同じく、返事のおうではあるが、平語のをゝと、をいそれ、をいこれ、をゝそれよ、をうよしよし、をゝそれか、などと、差支ない歌語

である。又、おやおや、をゝ寒む、をゝ暑つ、をゝつらや、なども、同じであつて
歌語として宜いと思ふ。

十一、否定詞（打消）

○ならじ　あたへじ

泣くものは大人にならじ泣く者は柿も與へじ梨もあたへじ　言道

ならじは、なるまじの略であるから宜い。へじはへずと同じである。

○みてみぬ

よそ目のみもて隱されて世の憂目見て見ぬふりもあはれいつまで　仝

見ぬは、見ず、と同じである。

○ざり

おとなしさ常には曾て見ざりけり美しき家にひきゐられ來て　作者不知

ざりは、ずありの約である。

○ざる

罪なきは乳房まさぐる稚子をおきて世に求むべき物の非ざる　仝

ざるは、ずあるの約で、持たざる、食はざる、學ばざる、働かざる、歩まざる、など多々ある。

○ず

見よとてや入江の岸に一木おちず杭毎に居て並ぶ水鳥　言道

ずは打消で、おちずは古言にて、萬葉集以來用ゐられてをる。

咲出し花さま形似る木なみ宿のさくらの外をしも見ず　仝

老いず死なず、飲まず食はず、など同じである。ぬと區別して使ふのは、音調と自

他とに依るのである。見ず知らずの人などは名詞になる。

○**いや　いやいや　いやな　いいえ**

この外に、應に對す否、即ちエスに對するノウの、いやおうなし、いやおういはぬ、いやといはぬ、いやといはさぬ、など、皆、歌語として宜い。

○**おのがにあらぬ**　　言道

秋深み壁にかけたる團扇さへおのがにあらぬ風に吹かれて

○**みえもせぬ**　　仝

春の夜の明方くらき野邊に來てよく見えもせぬ櫻めでかな

○**けしからぬ　げせぬ**

けしからぬは、異しくあらぬ、げせぬは解せぬである。

○**せからぬ**　　仝

散りぬれど所狹からぬ庭の面も一木の花のなべてふたぎつ

せからぬは、せまからぬで、せまくあらぬの約である。

十二、其他（補遺）

○**あるべかしく**（形狀言）　　言道

年を經てなきにしるきをよき事の有べかしくも思ふ行末

○**とにかく　ともかく　とかくして　とかう**

この類も、とやかく、とやかう、とかうして、などある。

○**よくなる**（動　詞）　　言道

逢見ればやがて快くなる心地してまことくすしき君ぞ此君

わるくなる、ようなる、あしくなる、など。

○**ごとも**（推量詞）

思ふどち彼方此方の定めなく寝たるが如も散れる松の葉　仝

これも、云ふが如、きくが如、見るが如、など。

○そよやこなた　（代名詞）

隣へと吹きこし風のめぐり來てそよや此方に散る櫻かな　仝

○なくなれる　（動　詞）

幼氣も早なくなれる童さへ背に負はるゝや樂しかるらむ　仝

○おとしかせし　（疑問詞）

何をかも落しかせしと水見れば底にのこれる片われの月　仝

○おもはく　（動詞より轉成せる名詞）

何事も聞れひがめて老の身の事確なるおもはくもなし　仝

○つぶやかれ　（仝）

皆人に笑ひ消たれて中々にまめだつ老のつぶやかれかな　仝

○あつらへ　（仝名詞）

童ども日に幾度か泣くならむさもあつらへに涙出で來て　仝

○うはのそら　（名　詞）

さばかりは枝も動かで庭松のうはの空なる風の音かな　仝

○みとみれば　（動　詞）

見と見れば門田のそほづいつも〳〵其方に人の在る心地して　仝

○ふるてるなしに　（動詞に形容詞の添へるもの）

秋の雨の降る照るなしに笠きたる山田の僧都つかれ顔なる　仝

てりふりなしにも、同じてある。

○あぢきなみたる　（動詞の自動言）

世の中をあぢきなみたる年の暮つかれ眠の埋火のもと　（前出）

○たがのにか　（疑問詞）

貧居歳暮

昔より持たる佛も誰がのにかなるべくなれる年の暮かな　言道

○ひさに（形容詞の名詞になれるもの）

萌え出でていと若げなる柳原淺みどりにて久にあれかし　仝

○きこえよかし（希求詞）

死ねかし、去ねかし、行ねかし、皆、同じである。

○て　は（てにをは又副詞）

では、にては、の平語であるが、それではと別れてぞ行く、など續くると宜い。又じや行かう、卽ち、ではさよなら、などは副詞になる。

○だから（副　詞）

だからは、それゆゑである、それだから、といふ平語であるが、使用がわるいと卑野にならう。

尙、重語の

ざつおいつ、寢つ起つ、諫めつ泣いつ、さしつ押へつ、ためつすがめつ、追ひつ追はれつ、轉げつまろびぬ、見つ聞つ、往つ來つ、組んづほぐれつ、起て見つ、寢て見つ、などあらう。

歌語の自由　終

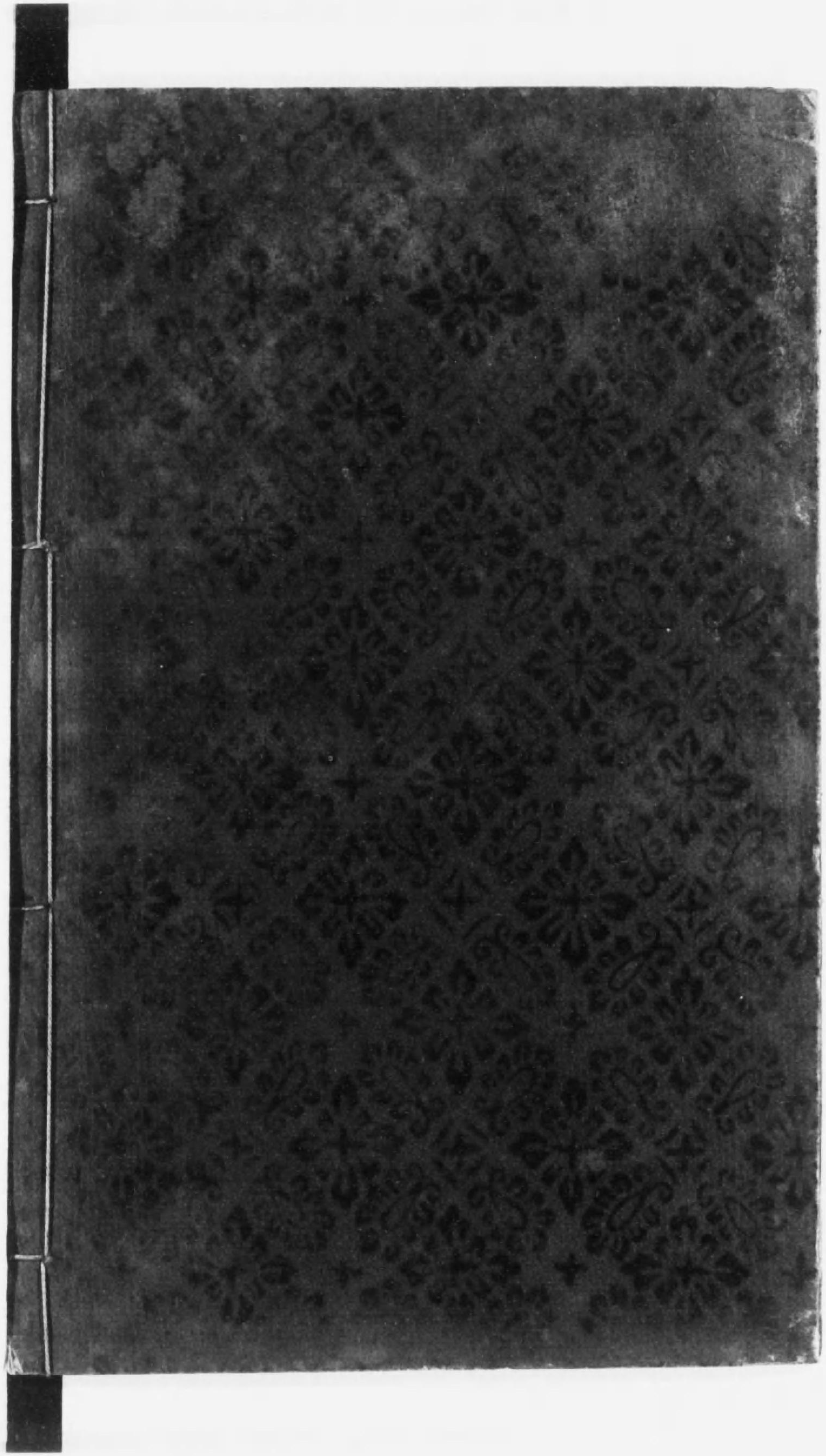
〔定價金七十錢〕

昭和四年八月十五日印刷
昭和四年八月二十日發行

著作兼發行者　大阪市天王寺區逢阪下之町五一番地　小野利教

印刷者　奈良市般若寺町二十一番地　八田德治郎

發行所　奈良市般若寺町二十二番地　八田印刷所　電話一一〇四番

325
314

終